

【佳作】

終の仕草

家森澄子・岡山県

夫の母は、八十一歳のとき脳梗塞で倒れた。

左半身不随になり、声も言葉も出せず意思の疎通ができなくなつた。僅かに動くのは右手足だけである。このような容体が1年余り続いていた。

病院へ職場の行き帰り早朝と夕方に義母を見舞うのである。回復を願いながら今日は、よい兆しが見えますようにと、朝夕祈りながら五階病棟へと急ぐ。

耳に被さつて白髪をかきあげ、

「お母さん、おはようございます」

右手をしつかりと握り声かけをするのだが今朝もなんの反応も示してくれない。

顔を拭き、口中を湿らしたガーゼで拭くと、少しこわばつた顔になるがその後は気持よさそうな穏やかな顔つきに変わる。

寝顔をじっと見ていると元気だった頃の義母の笑顔が思い出される。義父と一人で営んでいた布団店は長年のお得意さんが多く、義母は注文の布団を縫つてるときが一番楽しそうで、

「布団は毎日誰もが疲れを癒やすのに、かかせないものだから」

日本手拭いをかぶった、白髪交じりの頭に針を二度ほど潜らせ布団を綴じていく。物差しも当てずにその間隔は何ミリの誤差もない。これが、プロの技かと思える仕上がりであった。義母は技ばかりでなく、布団を使つてくれる人の身長や太り具合も考慮して、布団を仕上げていた。嬉しそうな笑顔で、

「これは婚礼布団なの、このお嬢さんが生まれたときベビー布団を縫わせて貰つたの、大学へ入学したときも仕立てさせてもらつたわ」

人生の節目節目に作らせていただく布団には、その人の幸せを祈りながら心を込めて縫わせて貰うと言う義母の優しさ。そこには商売と言う概念は消え去つていて、我が子か親戚の人の物を仕立て上げている心が感じられた。

夕方帰宅すると、

「手が空いたら、ちょっと手伝つてね」

と声が掛かる。私も今日はどんな布団が仕上がっているのかと、楽しみである。早速義母の仕事場に駆けつけてみると、縫い上がつた布団が積まれている。その一枚一枚の綿を落ち着かせる作業である。

布団を縦に置き同じ間隔で両方から持ち、同時に引っ張る最後に布団の端をそつと押さ

えて綿を落ち着かせる。

元気な頃の義母の姿を思い浮かべていると

「お客様ですよ」

と看護師さんの声で我にかえった。振り向くと義母と同じくらいの年齢の女の人が立つておられた。もちろん私は知らない人である、その方は義母の状態を目の当たりにして、私にいろいろ話しかけてくださった。

自分の子供が生まれたときから、その子の婚礼布団も仕立てて貰った中崎と申します、ここまで聞いて、話の内容からびんときた。

中崎さんはさらに続けて義父母との出会いの話も聞かせてくださった。
「ご両親はね、お父さんが、布団の布の見本を背負いお母さんが、綿の見本を背負つて歩いて行商されていました」

そのときから一軒ずつお得意を増やしていかれたという。その話は義父母から聞いた事は一度もなかつた。私が嫁いだ頃には、お店で営業していたが、義父母がお得意様を大切にされる気持ちが伝わってきた。

中崎さんは名残惜しそうに

「お母さんが一日も早く回復されて、寝心地の良い布団を縫つてくださることを、お祈りしています」

と、言葉をかけてくださり八十歳過ぎの丸まつた背中で木枯らしの中を帰つて行かれた。その後の一年間も朝夕義母を見舞つていたが、病状の回復は見られなかつた。

でも、医師から、

「今が一番病状が落ち着いています」

と、きいた頃義母の頭元を片づけていたとき僅かに動く義母の右手が、布団の上をか弱く二度たたいた。

入院以来二年ぶりに見た仕草である、私は慌ててこのときを逃してはと、思い、「お母さんどうしたの、何がほしいの、どこか痛いの」

早口で慌てて、耳を口元に近づけたが、顔の表情も変えず、目さえ開けてくれない。

それから後、病状が悪化し会わせたい人がいれば呼んであげるように言われ、親戚が集まつた。

そのとき義母は、右手をか弱く右に滑らし軽く二度布団を押さえた。先日見た仕草である。今度は瞬間に気づいた。左手が動かないから右手だけだったから気づかなかつたのだ。

義母は布団が仕上がつたとき、最後にする仕草なのだ。耳元で、

「お母さん、良い布団に仕上がりましたね」

義母は嫁いで六十年最後まで布団を縫い続け黄泉へと旅だつた。